

審査の結果の要旨

氏名 加藤理絵

現代日本社会では核家族化や病院死の増加により、若者が身近な者を看取ることを通して命の有限性や大切さを体験的に学ぶことが少なくなっており、若者に対する死生観の育成支援が重要なテーマとなっている。そこで本論文では、現代の若者の死生観の構造を明らかにした上で彼らに適した死生観の育成支援の方法を提案することを目的とした。

第1部では、研究レビューに基づき第1章で死生観を定義し、第2章で死生観教育の現状を把握し、第3章で論文の目的と構成を示した。第2部では、第4章で20～30歳代58名を対象に死のイメージ調査を行い、死生観が認知、感情、態度に分類できること、しかも想定する死の対象（自分、大切な人、他人）によりその様相が異なることを明らかにした上で「死に関する多面的認知尺度」（以下多面的認知尺度）を作成し、大学生と専門学校生604名を対象として尺度の標準化を行った。第5章では多面的認知尺度を用いて一般学生群（387名）、看護学生群（102名）、看護師群（294名）を対象に質問紙調査を実施し、想定する対象×集団の2要因分散分析を行った結果、死生観教育を受けた看護学生群は一般学生群よりも当事者性のある死に対してポジティブな意味づけをすることから死生観教育の意義が示された。その一方で死別体験を比較的多くもつ看護師群はポジティブな認知を抑制する傾向があることも明らかになり、死への直面化の影響力を十分考慮する必要性が示唆された。第6章では一般学生群を対象として多面的認知尺度と死生観尺度との関連性を検討し、死への恐怖や不安は生への積極性等ポジティブな認知と関わっていることを、そして第7章では充実感尺度との関連性を検討し、死に対するネガティブな感情や態度は人生における充実感と共存する健康的な反応であることを明らかにした。第3部では、第2部の結果を受けて死生観の育成支援プログラムを開発した。第8章では予備研究として小児がん病棟をテーマとするプログラムを中学生3年生(120名)に実施し、感想文の質的分析の結果、死に対する感情の共有の場の重要性が明らかとなった。第9章ではDVD視聴、ディスカッション、作文、家族との対話等から構成される「毎日を大切に生きるためのレッスン」（50分セッション×8回）を開発、18名（14-16歳）に実施し、作文とフォーカスグループインタビューの質的分析により死に対する感情反応の意義を検討した結果、第三者への共感、課題への感情移入、死の当事者性の実感という3つの感情反応カテゴリーが抽出され、これらは死に関する現実感の深まりを示す指標となることが示唆された。第10章ではドナーカードをテーマとして家族との対話を課題としたセッションの効果を検討した結果、死の当事者性を高める上で死に纏わる様々な視点の獲得の重要性が認められた。第4部では、第11章で本研究の意義をまとめ、第12章で今後の課題を示した。

本論文は、若者の死生観は想定する対象によって異なることを明らかにし、死へのネガティブな感情は死生観の育成支援において重要な意義があることを示した上で、具体的な死生観の育成支援プログラムを提案し、その有効性を示した点で特に意義が認められる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。